「復活した竹間沢人形の灯を消したくない」

4代目座元
前田（まえだ）　益夫（ますお）

4代目座元だけではなく、里神楽の太夫（たゆう）でもあり、多彩な才能の持ち主。趣味は毎朝のウォーキング。

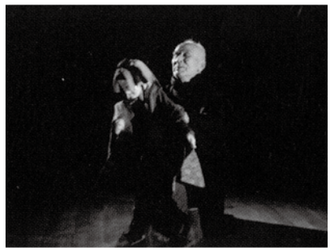
車人形の灯、再び

再び竹間沢車人形が脚光を浴びるのは、昭和46年に埼玉県教育委員会が実施した人形芝居用具緊急調査でのこと。前田家の納戸の隅に置かれた箱から、車人形の芝居用具がほとんど欠損することなく発見されました。

大正10年に最後の興行が行われてから、およそ50年の月日が流れていました。幸い、車人形を演じたことのある民部の子、前田信次（まえだのぶつぐ）さんと近（ちかし）さん兄弟が存命（ぞんめい）であり、昨日のことのように車人形が盛んであった頃のことを語り、調査は順調に進行しました。

翌年、竹間沢車人形は注目を集め「何とか再演できないものか」という声が高まっていきました。目が不自由になっていた近さんでしたが、再び人形を操ってみたいという熱意で、信次さんの子、前田益夫（まえだますお）さん、地元の池上喜雄（いけがみよしお）さんと共に練習の日々を重ねました。

そして、ついに昭和47年6月18日の復活公演を迎えることになります――。



↑復活公演で人形を操る前田近さん

昭和47年復活公演

大正10年に最後の興行が行われてから50年後の昭和47年6月18日。半世紀ぶりに行われた復活公演当日は「甦る郷土芸能」と新聞報道され、町立中央公民館（当時）は200人を超える観客で大盛況となりました。

その日の演目は「三番叟（さんばそう）」「一谷嫩軍記（いちのたにふたばぐんき）」「入相桜恋闇路（いりあいざくらこいのやみじ）」「鏡山故郷錦絵（かがみやまこきょうのにしきえ）」と盛りだくさんでしたが、あっという間の2時間だったと、当時の『広報みよし』は伝えています。

甦（よみがえ）る車人形の鼓動

「昔は、車人形で遊んだものです。頭を使って脅かしたり、ロクロ車に乗って遊んだりしていました（前田益夫さん）。」車人形の道具は全て前田家の手作り。右の写真の人形の腕には「信」の文字が。二代目座元、信忠さん（民部）が作った証（あかし）が今も残されています。

「首（かしら）、手足は初代の左近と二代目の民部が作ったと聞いています。人形の衣裳も同じく人形師が作りました。車人形のロクロ車は体格による差はなく、同じ規格サイズで作られています。それらを手直ししながら使い続けています。」

←興業の木戸札（きどふだ）（現在の入場券のようなもの）
歴史民俗資料館で展示中。

「車人形は文楽人形よりも可能性を秘めた芸能」

池上（いけがみ）　喜雄（よしお）

40年前の復活公演の舞台に立った一人。普段の優しい表情とは裏腹に、車人形を操ると一変する。

リハーサル風景。納得するまで確認する。

歴史民俗資料館で車人形の歴史に触れることができる。

その復活公演で車人形を演じた2人に当時の心境などをインタビューしました。

――今年で復活公演から40年を迎えましたが……。

前田益夫（以下前田）：未熟な演技しかできていないけど、あっという間に40年が経ってしまいました。

池上喜雄（以下池上）：正直、よく続けてこれたな、という気持ちです。当初はこんなに続くとは考えていませんでした。

――復活公演に関わった〝きっかけ〟を教えてください。

前田：家に道具があることは知っていましたが、県の調査でそれが貴重な道具であることを知り、車人形復活に意欲が沸き始めたことがきっかけです。

池上：20歳のとき、成人式の実行委員となったことがきっかけで、公民館と関わりが多くなり、当時の館長に「車人形が発見されたんだよ」という話を聞いて、復活に携わってみたいと思ったことが始まりです。

――復活公演までの準備期間、当時の様子を教えてください。

前田：近さんの目は不自由になっていましたが、記憶力は良かったんです。「この首（かしら）にはこの衣裳、この場面はこういう演技」というのを、言葉で教えてくれました。

池上：近さんから演目や物語の内容、背景を教えてもらって、演じ方や仕草は自分たちで確認をしました。

――40年前の復活公演の日の心境・思い出を教えてください。

前田：緊張しっぱなしのうちに終わった感じです。

池上：当時は背景幕、小道具などが少なく、演技を見てもらうよりも、発見された車人形を動かしているところを見てもらいたいという感じでした。

――最後にこれからの意気込み、竹間沢車人形への思いをお聞かせください。

前田：復活した竹間沢車人形の灯は消したくない。車人形は一人遣いですが、一人で舞台はできません。皆さんのご協力を得て、やっていかなければならないと思います。

池上：車人形は、文楽人形（ぶんらくにんぎょう）（※1）よりも演じ方によってはいろいろな可能性を秘めた芸能だと思います。その面白さをわかったうえで、一緒にやってくれる人が増えることを願っています。古典は古典で続けつつ、新しい取り組みにもどんどん挑戦していきたいです。

――ありがとうございました。

※1…文楽人形とは、文楽の操り芝居に用いる人形のことで、義太夫節（ぎだゆうぶし）の演奏に合わせて、人形を三人で操る。（大辞林第三版より引用）